

営農情報（大豆）

令和元年6月13日

（大豆営農情報 6月号）

J A福岡大城・南筑後普及指導センター

1 ほ場の準備

- 播種された大豆種子付近に麦わらが多量にあると、乾燥による発芽ムラを起こすことがあります。麦わらは、できるだけ均一にすき込みましょう。
- 播種前雑草対策として、ラウンドアップマックスロードを100～200倍希釈、もしくはバスタ液剤を200倍希釈で散布します。
- 耕起後は速やかに播種を行います。耕起後降雨があると、しばらくほ場が乾かず播種が遅れたり、逆に晴天が続くと、過乾燥で大豆が出芽しなかったり、出芽が遅れたりします。

2 播種

- 種子消毒は、キヒゲンを種子10kg当たり100g混和または、キヒゲンR-2フロアブルを種子10kg当たり200ml塗布します。
- 播種適期は7月10～20日です。天候を見ながら、地域内で一斉播種を行いましょう。
- 適期播の場合、播種量は3～4kg/10a、株間は30～20cm（1株2粒播）とします。早播きの場合や播種量が多い場合は、倒伏する恐れがあります。
- 降雨等により遅播（7月下旬頃）になる場合は、生育量を確保するため、播種量は6～8kg/10a、株間は15～10cmとします。
- 播種深度は3cmを基本とします。播種前後に雨が予測される場合はやや浅め、晴天が続くと予測される場合はやや深く（5～6cm程度）します。特に梅雨明け以降に播種した場合、晴天が続き、乾燥による出芽不良が生じることがあります。梅雨明け以降に播種する場合は、やや深めの播種深度（5cm程度）を心がけます。
- 大豆は通常、播種後1週間以内に出芽します。降雨等による出芽不良を判定する場合の目安とし、出芽不良の場合は播き直しを行いましょう。

3 雑草防除

大型ヒユ類やホオズキ類に対しては、ラクサー乳剤、プロールプラス乳剤が高い効果を示します。ただし、これらの雑草は、除草剤だけの防除は難しいため、中耕培土を適期に行うなど、耕種的防除を心がけて下さい。

使用時期	薬剤名	10a 当たり使用量	希釈水量	留意点
播種直後 (雑草発生前)	ラクサー粒剤	4～6kg	—	覆土は2～3cm以上とし、よく整地して鎮圧する。二重散布にならないように均一に散布する。
	サターンバアロ粒剤	4～6kg	—	
	ラクサー乳剤	400～600ml	100リットル	大型ヒユ類対策。
	プロールプラス乳剤	400～600ml	100リットル	大型ヒユ類対策。 更にイネ科に強い。

※土壌が乾燥している場合は、希釈水量を増やします。

○大型ヒユ類

イヌビユやホソアオゲイトウ等の種が存在しますが、いずれも大豆よりも草丈が高く、成熟すると茎が赤くなるものが多くなります。収穫の際にコンバインに巻き込むと、茎の汁で大豆が汚れます。



↑<イヌビユ幼植物>

<ホソアオゲイトウ>→



○ホオズキ類

ヒロハフウリンホオズキや、イヌホオズキ等の種が存在しますが、草丈は大豆と変わらない程度まで伸びます。収穫の際にコンバインに巻き込むと、茎の汁で大豆が汚れるほか、果実が大豆に混入します。

(写真は大豆栽培こよみに記載されています)

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!